あごら札幌

No. 293

2011. 2.27. 発行

通信購読料　(年間)1200円
郵便振替 02710-3-570あごら札幌

《 今 月 の 内 容 》

＊ あごら札幌通信廃刊にあたり・・・　・・・1頁
＊ 通信「あごら札幌」の最後に寄せて・・・2～3頁
＊ ３２年間―あごらと共に　・・・3頁
＊ さー 旅人 再開。人生全開フル稼働　・・・4～7頁
＊ コレデオシマイ　・・・8～12頁
＊ ありがとう　そしてさようなら「あごら札幌」..12～15頁
＊ 情　報　・・・・・・・・16頁

あごら札幌　連絡先：011-644-2927　細田

あごら札幌
通信廃刊にあたり・・・

今まで あごら札幌通信を購読していただき ありがとうございました。
１年ほど前から編集メンバーで話し合いを重ねてきた結果、通信は今号（２９３号）をもって廃刊とさせていただきます。

通信第１号発行は１９７９年１月。最初はＢ５版で毎月発行。近年はＡ４版で隔月発行でしたが、３２年間休まず発行し続けてきました。

しかしこの１０数年は編集メンバーも変わらず、書き手も固定化し、誌面のマンネリ化も言われるようになりました。メンバーの高齢化もあります。２０～３０代にあごらに関わった人も今では４０代後半～６０代。他の活動に主軸を移しつつある人、札幌を去る人、現役リタイア後の第２ステージを考える人等々、メンバーの状況、人間関係も変わりつつあります。

話し合いの結果、もう潮時だろうと判断しました。９０年代初めまでは毎月例会を開き、年に１回は大きな集会も開催し、会として活発に活動していましたが、近年は通信発行が主たる活動になっていました。

通信発行がなくなり、会としての活動はこれで休止という形になりますが、年数回はメンバーが集まり、「おしゃべり会」をしたいと考えています。
長い間読み続けてくださり、本当にありがとうございました。(細田)

通信「あごら札幌」の最後に寄せて

「あごら札幌」の３２年の歴史の中で、私がかかわったのは後半の期間だけですが、編集と原稿執筆を担当させてもらいました。（つまり、６人の編集担当者の中では一番の新参者ということです。）昨年、一昨年と聞きわけのない子供のように「あごらを続けたい」といい続けましたが、心境の変化をもたらした出来事もあり、渋々ながら「潮時」という言葉を受け入れました。

先に送られてきたＴさんの原稿を読ませてもらい、活発に活動していた頃を垣間見た思いがしました。最近は例会もなく何かの同人誌みたいでしたが、それが「あごら札幌」なんだと勘違いしていました。当時の様子を知っているからこそ「活動が停滞」とか「マンネリ化」とか「書き手が固定化して面白みがない」という読者の批判につながったのだろうと今にして思います。

平成７年の春、右も左もわからないまま札幌に出てきた私はＹ市のＨさんから紹介された「あごら」に足を踏み入れ、自由闊達で洗練されたフェミニスト達に圧倒され、そして魅了されました。もうその頃は、女性の生きにくさはジェンダーによるものであると認識されていましたが、セクシャルハラスメントという言葉はまだまだ広まってはいなかったような気がします。なんで私の考えとこんなに合うんだろうと驚き、母や弟、夫からのミミタコフレーズ「そんな考えはおかしい」はメンバーの誰からもいわれず、居心地は抜群でした。１年数か月でまた道内某市に引っ越すことになりましたが、勉強会のために札幌に行くたびにＨさん宅に泊めてもらったのも懐かしい思い出です。

平成１４年には再度札幌に引っ越して来ました。

私は一人でテレビや映画を見たり、本を読んだりすることで事足りており、友人関係は「あごら」と（今は札幌に居を移した）Ｙ市のＨさんとの途切れ途切れの交流だけで充分満足でした。しかし、ここにきて「あごら」で充足していたツケが回ってきたようです。つまり、友人関係を耕さなかったので、最近よく取り上げられる「無縁社会」とか「孤族の国」とかが身に迫ってきたのです。今住んでいる老朽マンションに知り合いはまったくいません。年末年始にひどい風邪をひいたとき、「誰にも発見されずに迎える最後」はすぐそこにあるように感じられ、「あごら」の女縁がなくなったら北海道にいる必然性はないんじゃないかとかいろいろ考え込んでしまいました。

正常な思考能力を取り戻すと、「本州の夏の暑さには多分もう耐えられない」という厳然とした事実と「通信がなくなっても女縁はなくならない」という希望的観測に支えられ、それまでは、漠然とまだずっと先だと考えていた「（いつ訪れるかもわからない）死」と「通信の最後」を受容することができたような気がします。

今までは通信があったからこそ文章にとどめることができましたが、これからどうしましょう？

たとえば、減量に成功し夢の６０kg

（約１５kg減）を達成しましたとか玉山やキナバル山に登りましたとかインドを旅してきましたとか雇止めされちゃったので同僚男性達からのいじめや嫌がらせの回想録を書きますとか・・・。そんな時こそ苦手なブログにチャレンジするチャンスかもしれません。

最後になりましたが、「あごら札幌」を読んでくださっていたすべての皆さん。今まで本当にありがとうございました。

編集メンバーの皆さん。Hさん宅でときどき食事をしたり、お茶を飲んだりすることは可能らしいので、旧交を温めつつそれぞれの今後を生きて行きましょう！

(K.S)

３２年間 ― あごらと共に

２０代の頃は自分に自信がなく、当時の恋人ともどう向き合っていいのか漠然とした不安を感じていました。その頃 組合女性部に関わり、男女平等の問題に少しずつ関心を持つようになってきていたのですが、その思いと実生活（彼との関係）とは全く結びついてなくて、自分の中で整理できない もやもやとした思いを抱えながら暮らしていました。

そんな時あごら札幌に関わり、リブ（当時はフェミニズムという言葉はなかったし、知らなかった）と出会い、目から鱗の思いでした。自分に自信がなく、色々な事にコンプレックスを感じて思い悩んでいたことが、実は「女であること、女として育てられたこと」と深い関わりがあるということが分かったからです。世間が女性に期待している「らしさ」に知らず知らず私も呪縛されていたということに気付かされました。息苦しく自分の中でもやもやしていたものの正体（＝ジェンダーの問題）が整理されてみえてきたことで、以降とても楽に生きられるようになりました。

あごら札幌に関わって三十数年。たくさんの素敵な女性たちと出会い、いろいろな影響をうけました。病気になったり、何か困った時にとんできてくれる信頼できる仲間たち。あごらが休会になっても、この「女縁」ネットワークは大事にしていきたいと思っています。

それにしても ３２年間分の通信をみていると色々な事が思い出されます。ジェンダーを意識した性教育に取り組むようになったこと。優生保護法改悪阻止連や国家秘密法に反対する女の会に関わったこと。「声なき叫び」や「戦士の刻印」等の映画上映を行ったこと。小沢遼子さん、上野千鶴子さんをはじめとして、たくさんのゲストを招いて毎年のように講演会をおこなっていたこと。その時々のフェミニズムの課題に真面目に一生懸命取り組んできたのだなあと感慨深いです。

（細田英理子）

昨年、めでたくリタイアした私は 翌4月1日、上京した。

さー 旅人 再開。人生全開フル稼働

私は、50歳になった時、決めた！これからの人間関係は贅沢にする。今までのように「来るもの拒まず、去る者追わず」ではなく、いやな奴は拒んでもいい、と。そして、めでたく『3度目のはたち』を迎えて、「これからの人生、快楽追求で生きる＝旅人」と、決めた。

身辺整理、これまでの活動との関わりをどうするか？

その中での「あごら札幌」。

一昨年、「もう止めよう」との声には「もう1年、やってみて、その後で決めよう」と提案し、やってみた。その結果が、「もう、いいかナ？」。この1年、自己満足、以外の表現が見当たらない。自己満足を自覚した以上、実費のみ、とはいえ会費をもらうのはどうか、な？ そうではない人たちもいたが、自分が中心になってやる！と言う人がいなかったので、この2月、293号をもって、閉刊が決まった。

私が「あごら」と出会ったのは、世界婦人会議のあった1975年、新宿。1977年に帰札し、あごらとは縁が切れた！と、思っていた所、強引？な当時の「あごら北海道・創始者？」のSさんに呼ばれて、例会出席。そこで、「これから出産・育児に埋没しないように、月1回の例会に出てくるように！(自分の時間を確保できるよ！)」と、いわれ、そうさせてもらった。・・それが、正解！ 本当によかった！！

出産後は1度も正社員にはなれなかったが、今、北海道ウィメンズユニオンの執行委員としてたびたび団交に出て、認識したことがあった。私が仕事を始めて35年。女を取り巻く状況は一部、ほんの少し良くなったかもしれないが、大勢としては変わっていない。わたしは、ひどい労働条件でよく耐えた、と思っていたが、今取り組んでいるケースを見ていると、「まだ、まし」だったようだ。人間関係でも恵まれていたな―、と。仕事で「ばね指」になった時も、職場のほうから「労災申請してください」と言われた。これは、当たり前なのだけれど、ユニオンで取り組んでいるケースは「労災」であることを頑なに認めない！ どうして、こんな優秀な女性を排除し、ばかな男を守ろうとするのか？？？ そんなケースばかりだ。

さて、「旅人」となった私は、昨年10月、インドと、その乗り継ぎ都市、北京をまわった。友人Mさんと26日間にわたる2人旅。 わがままな私は1人旅主義。しかし、Mさんも私も「慰霊」の旅がしたい、という希望で一致した。しかもMさん、スペイン巡礼の旅を企画していて、「バックパッカー・デビュー」したいのだという。私の10年前のバックパッカー・デビューも十分遅すぎた、と思っていたのに、「この旅」でデビューする、というのだ！！私たちは、日帰り旅行や1泊旅行などでお互いを知り合おうと努力し訓練して「この旅」に備えたのだ。

まずは、Mさんと私がインドの中で共通して「行きたいところ」、バラナシへ。Mさんは3～4年ぶり。私は9年ぶり。バラナシは何も変わっていないように見えた。早朝、まだ暗いうちに列車から降りた私たちは、ものすごい、いつもながらの喧騒の中、なんとかリキシャを捕まえた。私の交渉力では、通常（あとで知ることになるが）の2倍まで、値切る？のがやっとだった。しかも、ずいぶん遠いところで下ろさ

れた。なんとか地元の女性の後に着いて、ガンジス河のガンガー（川岸）へ。そこからも、ガンガー沿いに重い荷物を引きずりながら延々30分も歩いただろうか。
（ボートに乗ってもよかったのに、ただただ、ぼられたり、料金の交渉をするのが、嫌だったから。今、思うとケースバイケースでもよかったのに・・・）やっと目的地、「久美子ハウス」に到着。久美子さん、9年前より若返ったような・・。お連れ合いのジャンティーさん、あろうことか、私の頬にある「シミ」のことを「これは何ですか？」（日本語で）。彼は、私のシミを何かの印かと思ったようだ。インド人は日本人より肌がかなり黒い。肌黒の私でも白いほう、かもしれない。そして、ヒンズー教の人は額にティカという印をつけるので、その類かと思われたのか？？？
よく見ると、久美子さん、シミもなく若々しい。トホホ・・・。久美子ハウスは9年前と同じように汚かった。Mさんは前回のインド旅行では5つ☆ホテルに泊まったらしい。前からお互いに「汚い宿は、止めようね」と言っていたので「この宿で大丈夫？」とMさんに確認する。ここなら何でも日本語で聞くことが出来るので便利なのだ。私はこのバラナシで友人と会うことになっている。5月末の北京・万里の長城（八達嶺）に連れて行ってもらったイケメンさん。彼と、このバラナシで逢えたらいいね、と、メールでやり取りしていた。彼は汚い久美子ハウスを敬遠し、きれいな「シバ・ゲストハウス」に滞在していた。しかし、Mさん、「ここでいい」、と言うので、ここに3泊した。イケメンさんとも無事逢えて、早速、日本人女性経営の「メグ・カフェ」へ。バラナシでは安くておいしい日本食が楽しめる。翌日は前回、唯一、きれいだと思った「バラナシ大学」へ。前回はわが娘、織映と同じ年の青年と一緒に行ったので、道などあまり覚えていない。ここでも、リキシャとの交渉で行く前からくたくた！ 着いた大学では、頼みもしないのに、待っていると言って料金を受け取ってくれない！ 仕方がないので、まず、ヒンズー教のお寺へ。次に博物館へ。さて、帰ろう、という段になって、またまた交渉。帰り着いてからなら多勢に無勢。なんとか、1対1で話し合えるここで料金を決めなければならない。のんきなMさん「着いてから話し合ったら・・・」。状況を理解してもらえず、今後に不安が・・。言い値の半分でなんとか交渉成立。これでも、十分に高いはず！！ 降りるときにごねられても困るので、目的地の十分手前で「買い物がてら歩くから」と降りる。またしても、Mさん、「ありがとう！」とボールペンを2本もあげる。すかざず、横から手が伸びてきて、いい方のボールペンを知らない人にとられる。リキシャ・ワーラー（力車をこぐ人）の上司なのか、とられても本人はヘラヘラしていた。あとで、久美子さんに話したら、料金は1/5でよかったとか！！トホホ。ぼられたり、チップをたくさん渡したり、自分だけならそれでもよいのだが、その行為は後に続く旅人には迷惑な行為。旅行に関する仕事をしている人は真面目に働くより、騙したほうが身入りがいいと真面目に働かなくなる。私も「バックパッカー初心者」のころ、そうアドバイスされたことを思い出す。そういえば、ニューデリー近辺にはニセ政府公認案内所が乱立していて、とうとう1つも本物の案内所には行けなかった。空港のプリペードタクシーですら、騙されるそうな・・・。

今後の行程を詰めていくと、時間が足りなくなることが予測された。帰路もデリーからなので、その前のチェンナイ（マドラス）から飛行機を使うことにした。久美子

さんに相談し、エージェントに来てもらい、帰路のマドライ→チェンナイ→デリーの足が確保できた。しかし、ここでも、鉄道のチケットの代金を2倍とられた。鉄道チケットは2人用の1枚のなのに、2人別々に払わされたの！！ 日本人を介してもこの体たらくだ！！ 気を引き締めよう！！

バラナシ3日目は、ボートから朝日をのぞみ、花やロウソクを流し、それぞれ夫さんや母を偲ぶ。この旅、唯一の目的が達成された（ちょっと、大げさないいかたかな？）

翌朝、「イケメンさん」に見送られ、ムンバイ（ボンベイ）へ1泊2日の列車の旅。車中、親子3代の家族と仲良くなり、「オセロ」（日本発祥のゲームらしい）で遊んだり、折り紙を教えたりして楽しむ。折り紙のクジャクをおばあちゃんにプレゼントすると、しばらくして、おばあちゃん「もう1つ、折ってほしい」と頼みに来る。孫が通訳してくれるのだが、それでも、直接話してくれているのがうれしい。

昼頃ムンバイに着いた。持っているチケットは翌日ゴア（西海岸）へ出発する、というもの。（このチケットはデリーで、頼みもしないのに、ゲストハウスのオーナーの息子が勝手にアレンジし、しかも、望んでいない日程になっていた。しかもしかも、手数料込みで料金の3倍もする金額の物）ムンバイは2人とも来たことがあり、これと言って滞在に魅力は無い。そこで、バスがあったらバスで行こうと思い、バスチケットブースへ。3，4か所、聞いて回り、だいたい同じような代金を確認した。中でも、1番早く出発する代理店でチケット購入。このバス、ちゃんとしたバスターミナルからではなく、大きな道に面した「市営バスのバス停」みたいなところから出るらしい。というのも、心配しながら、定刻から待つこと30分。やっと乗れてから、「ここでよかったんだね」と一安心するような場所。しかし、不幸はここから始まった。前の座席のリクライニングは壊れている（席の右だけが後ろに倒れ、左はそのまま）。それで、背もたれが斜めになっている。私たちの席は1番後ろだったので、背もたれの不備は無かったが、ここはインド。3回も体全体が宙に浮いた。よく、むちうち症にならなかったものだ。翌朝、ゴアに着いたが、これまた、相当遠くのバスターミナルで降りてしまった。

・・・まだまだ困難は続くのだけれど（駅への近道、ということで、レールの上を歩いた！！）、割愛し、話は、私のこの旅の2つ目の目的地、サンカランコービルへ飛ぶ。

インド最南端、コモリン岬から、バスを2つ乗り継ぎ（大きなバスターミナルを２つ経由）、なんとか、サンカランコービルの日本山妙法寺に着いた。2002年に1度来たことがあるが、その時はマドライからのお坊さんたちとの貸切バスだったので、街中は通らなかった。こんなに大きな町だとは知らなかった。（なんと、チェンナイへ行く夜行列車が停まる町なのだ）。ここの住職、石谷上人とは、泊原発反対からの知り合いである。見渡す限りの原野に立派な本堂と「南妙法蓮華経」と書かれた石碑が立っている。その隣には建設中の仏舎利塔の土台が出来つつあった。

話は3年前にさかのぼるが、母の初七日の日、別の用事でインドの御上人から電話をいただいた。そして「お母様はいかがですか？」と尋ねられた。帰国のおり、2回もお見舞いいただいていた。亡くなったことをお話しすると、すぐにインドでご供養してくださった。それで、1度、この地で母の供養をしたかったのだ。

ここで、朝夕ともに4:30から2時間、団扇太鼓をたたきながらの「お勤め」に参加。なかなか無心にはなれず、5分間で平均200回「南妙法蓮華経」と唱えるので、計何回唱えことになるかとか、1回唱えるのに太鼓を6回打つので「南妙法蓮華経」と唱える6倍×2（御上人が唱えた後、私たちが唱えるが、御上人が唱えているときも太鼓は打っている）も、打っているんだーとか計算しながら「なんちゃってお勤め」をしていた。・・ここでも、Mさんの適応力はすごかった！ すっきり背筋を伸ばし、黙々とお勤めに参加してくれた。日中、仏舎利塔建設のための「石運び」（頭に石入れのかごを載せる）も、私は１回でギブアップ。作業も１時間しかできなかったが、Mさん、２時間挑戦。すごい！！

・・・・

この旅の最大の収穫。それは、1999年、初めてのインドで知り合った、小児マヒのような症状があり、歩けなかったセンティルが、松葉杖で歩いているのに出会えたこと。かつて石谷上人と出会うまでは、障害のため、ほとんど1人で外出できなかった。それが、石谷上人が日本から持ち帰った車椅子で、彼の人生は一変した。さらに石谷上人は、センティルが自分で歩行出来るようにと、彼を日本に呼んで義足を作った。しかし、十分に合わせる時間がなく、帰国してしまった。義足を持ち帰ったものの、合わずに血まみれになって、使えずじまい、というようなことを聞いていたので、マドライで思いがけず、センティルが歩けるのを見て、本当にうれしかった。感動した。この十年間少しずつ、からだに合うように義足の調整を続けたようだ。

そんな嬉しいこともあったが、トラベルはトラブル、を実践するような旅は続き、帰国途中の北京へ。

北京４泊。訪問は昨年５月に続いて２回目。前回知り合った日本人でフィリピン名「アテ・アコ」さん（彼女もフィリピン・バルナバクリニックの支援者）が宿泊先に訪ねてくれた。YHのオーナー、Nさんと私たち2名の計４人で豪華な夕食（それでも格安）を２回も付き合っていただき、満腹・しあわせ！！アテ・アコさんは、スーパーの買い物にも同行してくださり、いろいろ説明していただき、大助かり。みなさん、知ってました?? 杏仁ドーフの杏仁って、アーモンドのことだったんです・・・、というようなことが、いろいろわかったのでした。えっ、知らないのは私だけだったの？？？

Mさんと、1日1か所、慕田峪（万里の長城）、紫禁城（故宮）、胡同（北京に残る古い町並み）へ。YHで、電話・地下鉄・バスに乗れるSuica のようなものを借りて、随分役に立った。これ1枚でどこもピッと通り抜けられる。いちいち、切符を買ったり、行き先を告げることもない。しかも、バスに関してはバス代が6割引き、というお値打ち品。

これからも、札幌から直接海外に出られるエアーチャイナを使うと、ここ北京はハブ空港になるので、たびたび使うことになるだろう。北京滞在を10日くらいにしたら、中国国内をどこまで行けるか楽しみだ。

こうして、11年ぶりの久々の2人旅は、楽しいうちに終わった。あごらに、旅日記を書くのもこれが最後。

長々お付き合いただいて、ありがとうございました。

（高橋 芳恵）

コレデオシマイ

今号で『あごら札幌』は終刊とする、とみんなで決めた。何だかおっきな忘れ物をしたような気分だ。でも、紙媒体での『あごら札幌』はもう潮時なんだろうな、とも思う。

これで最後だ、となると何でも詰め込みたくなった。移住してから書いた文章のいくつかを加筆・修正・圧縮して載せます。落語の三題噺みたいには巧くまとめられなかったけど、ま、読んでください。

【間に合わせのもの　がない暮らし】
（身辺雑記）

日本の北端から南端まで引越しました。運賃が高くつくのと、輸送にべらぼうな時間がかかる（6週間以上）ので、各自の衣類・書籍・PC（MacとNEC）・Vitacraftの鍋と宮文の包丁以外はほとんど全て現地調達することにして移動しました。

引越を契機に「家にある持ち物をすべてリストアップする」という作業を徹底してみました。これは、物を殖やさずに生活するのにとても有効です。エアコンや洗濯機、カーテンなど絶対に必要なものはすぐ購入しました。しかし、それ以外はしばらく生活してみて、「どうしても必要」「これがデザイン・機能・価格ともいいね」とふたりの意見が一致したものを少しずつ調達しました。引越して1ヵ月半で、新たに購入する大物がほぼなくなりました。

手のかかる子どもがいて、フルタイムで仕事していたら、ここまで時間と手間をかけて生活のスリム化をするのはむりだったろうと思います。ダイニングテーブル兼作業机（幅140㎝）と本部屋の作業机（幅150㎝）を決定するまでの1ヵ月は和室のちゃぶ台（幅80㎝×奥行50㎝）だけで生活したし、LDの収納家具を決めるまでの約3週間はまともな炊事ができずに耐乏生活をしたし…、大変でした。本部屋の収納家具だけは移動前に無印「スタッキングシェルフ」（5×4）と決めていて、その容量の8割分だけを選択・箱詰めして移動させたので、箱をふたりで組み立てたら1日で本・DVDは片づいたのですが。まあ、苦労した甲斐があって、食器・炊飯器・超小型オーブンレンジ・鍋類＆ざる＆蒸し器や料理器具類・料理本は全部！高さ185㎝・幅88㎝・奥行40㎝の汎用食器棚に収まったし、ストック食品も調味料を除いて高さ79㎝・幅60㎝・奥行40㎝の引き出しに収まりました。

さて。リストに載った物たちの品目数は約300。「書籍」も「携帯マグ」も「半袖トップス」も1品目としてカウントしています。点数はどのくらいかな…。2010年11月下旬の時点で衣類（下着も含む）は大人2人分で104点、書籍は155点（Kindle・PCに入っているものを除く）でした。モンゴルの遊牧民は約300点の品物で生活しており、日本の一般家庭では約3000点（6000点だったかな）の品目を所有していると本で読みましたが、うちは結構少ないもので生活していると思います。うちの中に「間に合わせのもの」がないのは、とても気持ちのいいものです。

友人から贈られた『シンプルに生きる』のなかに「自分の家が火事になったと想定し、まずなにを買うべきかリストを作ってみる」という一文がありますが、それを図らずも実践している感じです。衝動買いが本当に少なくなり、物の管理が楽になりました。3DK（約50㎡）の小さな賃貸マンションで、収納スペースは1間の押し入れと半間の物入れのみ、台所が特殊な造り（流し上の棚が高すぎて物を入れたら背伸びしないと取れない・流しの上に水切り棚を設置しようとしたら水栓位置が高くて設

置できない・流し台が高さも奥行も古い公団サイズでモノ入れは少々カビ臭い）のために流し上下にほとんど物を収納できないという「悪条件」でもゆったり暮らしています。

【北海道子どもの虐待防止協会設立の頃】
（思い出噺）

新しいつれあいの病気療養のため移住するのを機に、ここ10年は名前のみだった北海道子どもの虐待防止協会の運営委員を降りました。創立メンバーのひとり、ということで運営委員のみなさまに心温まる送別会を開いていただきました。その席上、協会設立の頃をよく知らない若い世代から『こういう話は初めて聴きました』という感想を伺い、設立当初の話を記録するために筆をとっています。

'95年のまだ雪のちらつく季節、私は 北大教育学部（現：中央大学）の横湯教授という女性から電話を受け取りました。これが、すべての始まりでした。

『私、東京から札幌に赴任してきたばかりなんですが、ぜひ北海道でも児童虐待を防止するネットワークやホットラインを作りたいと考えているんです。それで、東京で子どもの虐待防止協会の事務局（当時）をしている斎藤学先生に相談したら、北海道医療大学（当時）の伊藤先生とあなたの二人のお名前を紹介してくださって･･･。私達の周囲でこういう問題に関わってくれそうな方を誘って、みなさんで一回お会いして、相談しませんか？』　当時の私は、『誰にも言えなかった』や『精神科治療学』の特集などを読み、自分の担当患者さん達が話す生活史のなかに虐待と呼ぶべきエピソードがあまりにも多い事実と「虐待」という概念とが、自分の中でようやく結びついてきたレベルでした。当時の精神科医（日本）の大多数がそうだったように、虐待による外傷性精神障害の深刻さをようやく理解したところでした。どんな疾病でも予防にまさる治療はないですが、特に虐待による外傷性精神障害（治療に莫大なエネルギーと時間がかかる）に対しては、予防です。先輩の道立精神保健福祉センターの田辺等先生や札幌市立静療院（当時）の田中哲先生を誘い、札幌駅北口近くのレストランにて十数名の参加で、最初の会合を持ちました。横湯先生が手書きのレジュメを用意してくれました。「ネットワークを大きくし、自分達の課題を明確にするために、まずは児童虐待について勉強しよう」と研究会を発足させました。

児童相談所・養護施設・女性相談援助センターの関係者や、大阪の児童虐待防止協会の関係者から、現在の状況や実際に行っているサービスについて教えてもらったり、弁護士さんから現場で危機介入をする際の法的手段について講義を受けたり、病院・施設など多くの関係者が関与した実際のケース検討をしたりしました。回を重ねるごとにどんどん参加者が増えました。研究会のおかげで、様々な公的サービスが既にされていることがよく整理できて勉強になったと同時に、特に児童相談所（以下児相）職員の圧倒的な不足や訓練の問題（現在でも児相職員を専門職として採用して専任配置している自治体は大阪など非常に少ない）などを知るにつけて「民間の小回りが効く機関が現時点ではやっぱり必要だねえ」という皆の想いも、強くなりました。研究会の運営をするメンバーがいつの間にか北海道子どもの虐待防止協会準備メンバーになり、準備会では「電話相談チーム」「事務方チーム」に別れて準備作業をすすめました。当時事務局長だった松本伊智朗先生らと規約や紹介リーフレットを作成したり、松本先生の研究室を間借りした事務所スペースに様々な物品を調達して運び込んだり、準備作業をしていたのが昨日のことのように思い出されます。

そして、'96年7月に北海道子どもの虐待防止協会が設立されました。とはいえ、「金はない」「実際に電話相談の受話器を握れそうな人間も、みなフルタイムで仕事

をしているから、『土曜日の午後』という時間帯から相談を開始するしかない」「事務局機能もしっかりしていない」など、熱意と工夫以外は”ないないづくし”からのスタートでした。
発足当初の活動の柱は以下の3点でした。
1）電話相談（土曜日の午後1時～5時）
2）研究会を軸としたネットワークづくり
3）研修・広報活動　（年6回会報発行）
ところで、北海道子どもの虐待防止協会（以下　協会）が設立された時期は、全国各地でたくさんの児童虐待防止の団体が設立されていった時期です。その中で北海道の特色といえるのは、何と言っても設立当初から所長レベルの現役児相職員（当時）～家村昭矩さん・宮地廸彦さん～が関与しており、おふたりの尽力で「覚書」を行政と交わせた団体である、ということでしょう。
北海道の「覚書」は、行政が民間団体をパートナーとして協働していくことを文書で確認したもので、日本全体の児童虐待防止活動の方向性をより実り多いものにしていく上で画期的なものでした。みなさまご存知のように、行政を動かすには前例があることがとても重要なので、北海道で突破口を開けたことは大きな財産だと考えています。
設立から14年･･･、時代は変わりました。これから、協会はどういう働きをしていくのか？　協会が、身の丈にあい、時代と地域のニーズに合致した活動を継続していくことを心から願っています。

【傷はぜったい消毒するな】

（書評）

とてもクリアカットで説得力のある内容です。
一般市民にとって理解しやすく、かつ安全に実践できる内容であることは、多くのレヴューで触れられているので、それについては他のレヴューに譲ります。
医療関係者であれば、本書によらずとも、筆者のサイトにアクセスして記載を丁寧に読み込むことで、湿潤治療の理論から臨床まで理解することはじゅうぶんに可能です。それでも、私は本書を読むことを強くお薦めしたいと思います。
というのは、筆者が湿潤治療をするようになった経緯（第4章）や、「人はなぜ傷を消毒し、乾かすようになったのか」という歴史について触れた記述（第6章）、傷の化膿をめぐる医療現場の混乱をクリアカットに整理して真に科学的な対処を提唱した記述（第7章）などを読むことが、とても教育的だからです。ものごとを表層だけで理解して実践するのではなく、科学的なものの見方で常に検証しながら実践する態度を身につけることがいかに大切か、が分かるからです。「歴史から学ぶ」ことの重要性も改めて知ることができます。
あるプライマリ・ケア医向け医学雑誌の2009年12月号で「昨日の常識は今日の非常識」という特集がなされましたが、もちろん本書のメイン・テーマである湿潤治療についても他のトピック同様に 2ページでさわりだけが取り上げられていました。その程度の解説で分かったつもりになるのは、とても簡単です。
ただ、本書を読む前の私も含めて「褥瘡の治療は湿潤治療なんだよね」「イソジン消毒は傷にいけないんだよね」程度の部分的理解に留まっている医療関係者がまだまだ多いのではないかと思います。そこで考え方の原則が見えていない理解のままだと、「感染を起こした褥瘡になぜゲーベン・クリームとガーゼによる治療はまずいのか」「重度熱傷の治療でも植皮せずに治療できるのはなぜか」といった”応用問題”になると、とたんに思考停止状態になり、旧来の”治療”に立ち戻ってしまう。そういう実例が私の周囲にも散見されます。
本書を通読すると、「一見もっともらしい”科学常識”のウソ」を見抜くことがかなり上手になります。お薦めです。

【ネット・カフェ化計画】

（身辺雑記）

こたびの札幌滞在は、ほとんど半日、岡本さんち（多くの世間のひとなら「実家」と呼ぶ）のパソコンの買い換えとメールソフト設定でつぶれました。

パソコンは、近くのCaDenでそこそこの値段の秋冬モデルを速攻で買ったのよ。インターネットもすぐ開通したのよ。
元々、岡本さんちは、ひかりファイバーが通っていたからね（ちなみに私の札幌別宅はe-Mobileでネットに繋げてて、遅いし不安定）。私としては、じいさん（世間のひとは「父親」と呼ぶ）の使ってた古いXPパソコンを恩着せがましく買い換えることで、速くて快適なネット環境をエンジョイするのが目的だったわけ。ネットに繋げて、自分とじいさんのアカウント設定をしたら、移動とカンヅメ研修会のために2日弱できなかったメールチェック（ネットに繋がりさえすれば使えるWebメールはほんと便利だ）等をさっさとするつもりだったのよ。

ところが…。情けをかけて、じいさんのメールソフトの設定をしてやろうとして、ドツボにはまった（Sigh）。本人が合計3冊のメモ帳の随所に保存（？）していたパスワードははじかれまくり（どの部分が「本当の」パスワードなのかが分からん書き方のメモまであった）、設定されているパスワードは7文字と分かったものの、はじかれた以外で「作りそうなパスワード」を作ってみても7文字にはならない。しかも、設定画面を開いていたら、じいさんが勝手にいじって古いPCまでメールの送受信ができなくなってしまった。＊＊＊＊＊＊＊と7文字で設定されているパスワード入力欄に、さっきはじかれて無効だと判明しているパスワードを懲りずに入力する、という暴挙をやらかしたのだ！！

当然、がんがん怒ったし、「帰ろう」って正直思いましたよ。だけど、じいさんが「何とかできないかな、って思ってやったんだ…」「誰かのメールが届いていてもわかんない。このままじゃメールが出せない」（当たり前だろ！　自分で古いPCの設定を壊したんだから）と悄然として、いつもの居直りパターンではなかったので、善後策を講ずることにしました。

とりあえずGmailのアカウントを作り、ひんぱんに連絡する相手のアドレスを手動入力（アドレス帳の引越ができず）して、「正しいパスワードを書面で確認できるまでの約1週間はNiftyアドレスが使えないので、急ぎのメールはこちらに送信して下さい」っていう一斉同報通知を出した。この手動入力がまた大変で、じいさんがアドレスを誤読してメールが戻ってきて再入力したのが1件、再々入力したのが1件あった。

さらに特別大サービスで、届いたメールをNifty アドレスからGmailアドレスに転送させようとNiftyの会員サービス画面に入って設定変更を試みると「このIDでは、その操作はできません」ってはねられる。何かいいヒントがないかなぁ、ってウロウロしていたら、PC画面が「何かお困りですか？」って訊いてきた！！　富士通PCに買い換えて良かったです。接続設定のオンライン・チャット・ヘルプだったのです。少し質問したら、本人が料金を払ってるつもりのIDはセカンド・メールだかのIDで課金されていないと判明！　さあ〜、もう1回大昔のパスワードを羅列したメモを捜索したら……7文字パスワードがありました　♪

さて。今回は、われながら「だいぶ回復が進んだな」って思ったね。じいさんとの境界・距離は私がきちんとコントロールしていたので、不快になることもなかった。境界を越えて侵入されそうな時や世話焼きを強要された時は「そういうの、厭だから」「そこまでは、私、やらないよ」とぴしっと言えたし、相手もそれで引き下がったし。

設定作業中に訪問看護師さんや最近入っているヘルパーさんとも顔見知りになれた

し、最近はどんなサービスを受けているのか、見ることもできたし。改訂長谷川式認知症スクリーニングテスト（通称"長谷川"）も両方に施行できたし。ま、だいたいの状況は確認できましたね。当分は今のサービスで在宅生活が維持できるでしょう。ADL（日常生活動作）がはるかに劣る母親の方が"長谷川"は満点だというのが意外でしたがね。

…「字数は任意」に甘えて、詰め込んじゃった。

今は、Face Bookでしゃべるにはちょいと長すぎる情報で資料的価値があるもの（例えば「うつ病の基礎知識」「Bad Newsの伝え方」「アルコール依存症のプライマリ・ケア」「簡易版アルコール白書」とかのレジュメ）をぼちぼちとまとめて、「Dr.Shareのメモ帳」っていうBlogに載せてます。私の場合は、毎日、他人様にお知らせする価値があるような生活を送っているわけではないから、Blogを書くって抵抗があった。今は、Netに資料を載せる媒体だと割り切ってBlogを使っています。興味があったら、覗いてみてね。それでは、ほんとにコレデオシマイ。

(Mami)

ありがとう　そしてさようなら「あごら札幌」

30代のころ様々な迷いがあった。そんな時Hさんという司法修習生に誘われて、「あごら札幌」を知った。

少し通っているうちに、長い事胸につかえていた事が、深い霧が晴れるように見えてきた。私が悪いのではないのだ。潜在している社会的格差「女らしさ」や「女だから」の呪縛にいつの間にか取り込まれていた自分に気がついた。男と女のこの格差が、言葉として思想として社会的に確立していることに改めて驚いた。

学生時代、男と対等に議論しているのに何故か感じる屈辱感があった。まだフェミニズムも女性学も産声を上げる時ではなく、多くの女性たちは何か分からない圧迫感に苛立っていた。

ひとつ答えが見つかると世の中が別に見えてくる事がある。「あごら」はあの時代、私に似た女たちの通過点となり、学習会や、講演会等様々な活動を通して、女たちの解放を支える場としての役割を担ってきた。

そして沢山の、そしてひとりひとりの女達の深い霧を拭い、ここにその役目を終える。

私なりの「あごら札幌」との30年間の振り返りをしてみたい。

■ 忘れられない母の葬儀

私の母の葬儀は「あごら葬」のようであった。天涯孤独の私にはあごらの仲間が身内以上に力になってくれた事が、感謝しきれない思い出として残っている。入院の時はさまざまな病院の情報を寄せてくれて、車のない私を載せて病院周りもしてくれた。入院時には車での送迎も本当に親身に力なって助けてくれた。Tさんには夫のYさんも一緒にお世話になった。葬儀の時はHさんに通帳と印鑑を託し、葬儀全体の見事な仕切りをして頂いた。Oさんには寒い中スカート姿で下足番をお願いした。

いざという時頼りになるのは女たちであることを母の葬儀を通して教えられた。私の母の葬儀の後、会員の家族の葬儀が続き

あごらとして連携力（？）を発揮した。
上野千鶴子さん言うところの「女縁」とはこういう事なのではないだろうか。

■「あごら札幌」に続くものは？

札幌のあごらは役目を終えるが、東京の「あごら」本誌に心からの期待と声援を送りたい。これまでと同様、何の力にもなれないと思うが、沖縄問題をはじめ様々な市民運動の場で東京の「あごら」の名前を見ると本当に頭が下がる思いである。編集内容もずしりと重く、これからも女の目線で世界を見続けてほしいと願う。

近頃の断捨離ブームにのった訳でもないが、書類の整理をしたら段ボールに20個もあった。

ほとんどが市民運動の通信である。どの会の通信もあごら同様30年以上は続いていて、もう立派に運動史と言える内容であり思想史になっている。送られてきた通信を見ると、自分が、何に係わって来たのか見えてくる。主に、反原発と反核、反戦、そして活動している世界中の女たちとの交流がほとんどであった。

■「女はみんな生きている」

「赤ちゃんに乾杯」で知られるコリーヌセロー監督（フランス）の2001年の映画のタイトルである。女の目線からの作が小気味良い。世の男どもがいかに女の言葉に耳を傾けないかを明るいタッチで描いている。このタイトルが好きであごらでも度々使わせて頂いた。

これまでに出会った素敵な女たちに思いを巡らせてみたい。

・その①　非暴力直接行動の女達

反原発運動の中で沢山の素敵な女たちにであった。このつながりが私の人生をどれほど豊かにしてくれたか言葉では言い尽くせない。北海道の泊発電所を止める事から始まった私の反原発運動は、札幌という消費の町でデモをする事に疑問を抱き、東北の原発現地の農業者、漁業者の声を聴き、彼らを支援する市民との出会いで覚醒の機会を与えられた。今も六ケ所で農業をしながら核燃に反対している菊川慶子さんと知りあい、「花とハーブの里」にも何度も通った。六ヶ所の核燃を止めるために全国から集まった女たちとウラン搬入阻止で1カ月女達のテント生活を実行した。のべにして6080人の警察官の前にウランは搬入されてしまったが、花と歌と踊りで心から一つになった女達のテントは実に楽しかった。「かつて男たちは戦争のために家を出た。今、女達は平和のために家を出る」。これは15年間の女達のテントでアメリカのミサイル基地を止めた、イギリスのグリーナムコモンの女達の言葉である。六ヶ所のテントにグリーナムに参加した女性がいて、私たちはグリーナムコモンから沢山の事を学んだのである。2003年にはグリーナムコモンの流れをくむアンジー・ジェルターさんを札幌にも招いた。彼女たちは原子力潜水艦の施設の1部を家庭用のハンマーで壊したが、スコットランドの裁判所は「核兵器は国際法違反」として3人の女性を無罪にしたのである。

非暴力直接行動を行う際、私たちは様々なトレーニングとミーティングを重ねた。北海道には何故かこの運動が今一つ馴染まないような気がして寂しく感じている。

北海道電力の株主運動も16年間続けた。ある意味「非暴力直接行動」の一つと言えるかもしれない。

比例区選挙が導入された年、「原発いらない人々」の選挙に集まった流れで、株主総会で電力会社に反原発を提案しようという動きが始まった。私は東京や名古屋の学習会に通い、北海道でも運動が立ちあがった。沢山の人が知恵と力を寄せ、途中で北電との裁判もあり盛り上がりも見せたが、諸事情でどんどん人が減り、気がつけば総会の提案作成から、アルバイトを依頼してのワープロ打ち、400通もの発送作業、会社との交渉等ひとりになっていた。残念な

がら負担に耐えかねて九電力のうちついに北海道は運動から離脱した。

この事のショックは余りにも大きかったが、六ヶ所のテントの女たちがしっかりと支えてくれた。彼女たちは上関原発、六ヶ所、福島等で活動を継続しており、今度なかまで映画を作製する動きがあり楽しみである。

・その②　イラクの女性殺害を止める「オープン」の会

マスコミの報道は今やエジプト等に変わりつつあり、イラクを取り上げる記事は影を薄めている。私はロンドンを中継地としてアメリカやヨーロッパ、日本に配信されている映像を見る会を月1度仲間と持っている。アメリカの帰還兵を中心とした反戦運動は全くと言っていいほど日本には流れない。しかしそれは確実にアメリカ国内に浸透している。4月9日には「イラク戦争を検証する」ための上映会を持つ。貧しいアメリカの若者が経済のために兵士となり更に弱いイラクの市民を殺すのである。しかしその弱いイラクの男たちが更に弱い女たちを殺す事実を見逃してはならない。大衆の面前で石を用い、妹や姉や娘を殺すのである。それは思わず目を覆いたくなる惨劇の場面であった。宗派の違う男と関係を持ったという理由で何万人という女性の死体が積み重なっている。女性の人権は問題とされない。ジーパンを履いていた、大学に通っている、頭にかぶり物をしない等の理由で殺される。勿論これに反対するイラク市民も多い。国連に女性の人権侵害で訴える動きも起きている。東京、大阪の「オープン」が日本での動きを作っている。

そこで思うのは宗教の中での女性差別である。これは慣習となって生活のなかに浸透しており、現実の社会の写しであるから、容易には変わらない。

あごら札幌の創立者の１人である山口里子さんの著書「新しい聖書の学び」（の学習会）を月１回、女性牧師や仲間としている。フェミニスト神学を学ぶことで、キリスト教の中の女性差別が見えてきてとても面白く有意義な学びの会である。仏教も又女性差別がある。大越愛子著［仏教寺院内部の女性たちから体制仏教の差別性］の中でも男支配の暴力性への告発を述べている。

昨年の９月、福島市在住のルワンダ女性マリールイーズさんをお招きして講演会ツアーを行った。ルワンダは「奇跡のルワンダ」と呼ばれ惨劇から立ち直りを始めている。ルイーズさんによると、憎しみを越えて許すというキリスト教の教えが大きいとの事であった。今やルワンダは議員の54%が女性との事。女性議員を増やしていくのも戦争反対への道とは言えないだろうか？

三井マリ子さんのノルウェー報告にもあるように「大事な事を決める時に女性がいないのは問題」である。

■ あごらの経験を次のステップに

「あごら札幌」の終わりは私の中での、ある種の区切りであり出発である。リブの運動も70年代とは随分様子が変わって来た。当時のリブ達も親の介護や自分の始末を考える時期に入ってきている。私は今、仲間たちと「老い支度」のファイルを準備している。どんな死を迎えるかはどんな生を生きるかに繋がる。医師によると尊厳死もなかなか複雑と聞いている。植物人間になっても生きたいのか、献体は？　葬儀の花は何がお望み？　などと話し合っていると、なんだかその時も怖くない気がしてくる。あなたの時には真っ赤なバラを１輪。私はユリの花を５本でいい。等とそんなに遠くない時を語り、ファイルにしておく。リブ達もそろそろ還暦なのである。

「あごら札幌」32年！よくぞ続いたとしみじみ思う。会計の役と会議会場を提供してくれたＨさんの力は大きい。改めてお

礼と感謝を申し上げる。
　会員の皆さんの今後の活躍に期待を込めて。皆さん有難う。

（谷百合子）

あごらの通信から

細田さんが３２年間、きちんとファイルしていたあごらの通信がある。ずしりと重いファイルを見て、胸が熱くなった。コツコツと３２年間整理してくれていた地味ではあるが大切な記録保管に、正直感動である。

もう一つは通信の内容の重みである。今日、断捨離ブームとの事であるが、あごらの３２年間の通信は、沢山の女達の歴史が織り込まれており、何とも愛おしいのである。

全てを紹介することができないのは残念であるが、初期の通信紹介を通して、女達の悩み、元気がお伝えできたら幸いである。

例会の場所もススキノ「ノア」や「ミドリ」「ひらひら」「女性センター」等といろいろな会場で、昼と夜の部を設ける時もあった。子育てや、家事、仕事等様々な状況があったのだろう。

初期の通信は勿論手書き。通信担当が其々のセンスで編集していたので毎月カットも字体も違っていて、それなりに味があり楽しめる。

初期の通信から抜粋

1979年　2月～　「労基法と母性保護」「女にとってこどもとは」読書会
　　5月～　「学童保育」
　　10月　「女が働くこと」「離婚は怖くない」読書会
1980年　7月　あごら合宿
　　「今戦争を考える」「声なき叫び」上映会「憲法講座」
　　「女と政治」「女と老後」
1983年　「遺伝子工学と優生思想」
1984年　「主婦は何処へ」「働くという事と働けるという事」
　　主婦論争を解決の糸口として
1986年　「上野千鶴子著　資本制と家事労働」を読む
1990年　「ポスト・モダンフェミニズム」
　　「男女平等の視点から性教育」
　　「強姦神話にとらわれていませんか？」
　　「曽野綾子VS上野千鶴子論争」「カラーパープルを見て」
　　「道警の宣伝ポスターに抗議する」「サイレントレター」
1992年　「子どもへの性的虐待」

シリーズものでは「あごらと私」があり、
あごらとの出会いや、あごらから得たものを書くコーナーがあった。
フェミニストの本棚や反原発の報告等も掲載回数が多い。

このコーナーの続編は 余力があればお楽しみ！

（谷百合子）

Information

❄ 子宮頸がんワクチンを考えよう

3月19日（土）13：30～15：30　かでる2.7　520号室

講師：医学博士　母里 啓子 さん　（ワクチントーク全国代表）

主催：子宮頸がんワクチンを考える会実行委員会

協賛団体：北海道教職員組合

❄ 戦争をやめろ！ さっぽろ・ピースウォーク

3月20日（日）12：30～13：30　大通り西4丁目

・・・9.11から10年　イラク戦争開始から8年

呼びかけ：北海道平和運動フォーラム
ほっかいどうピースネット
有事法制定反対道民連絡会

❄「イラク戦争の検証を求める」上映と講演会

4月9日（土）開場13:00　エルプラザ3階　音楽スタジオ第2

映画「君はなぜ戦争に行った？」　上映13:30～

講師：森文洋さん（イラク取材報告）　講演14:40～

資料代：800円

連絡先：谷百合子「無防備平和のまちをつくる札幌市民の会」011-664-0632

4月10日（日）10:00～　石狩図書館　連絡先　0133-74-9062

～*～・～*～・～*～・～*～・～*～・～*～・～*～・～*～

《あとがき》

☆ 私はこの3月で早期退職します。しばらくは母の介護が中心となる生活になると思いますが、そのうち性暴力被害者支援のための活動に関われたらなあと考えています。（細田）

☆ 通信のレイアウト担当してました柏原です。書きたいことは色々あったのだけど、どうにも原稿にできませんでした。この2年は、私もそれなりに色々ありました。父が手術で入院したり、大好きなお友達が去っていったり、10年以上と20年以上参加していたサークルが相次いで活動停止となったり…。12歳の猫を2年前、17歳の愛猫も1ヶ月半の病院通いの末に数日前、見送りました。
春からは心機一転、したかったことを色々片付けていきたいと思います。